

校長会報



愛媛県小中学校長会 〒790-8545 松山市祝谷町 1-5-33 エスポワール愛媛文教会館内 ☎089(921)4320



学校経営に思いつくこと

愛媛県小中学校長会 副会長 前原 淳

今年度の校長会活動方針の基本方策に「校長のリーダーシップとマネジメント力を発揮した学校経営の充実」が掲げられ、その重要性や必要性は前号の巻頭言で客野会長が述べているとおりです。この「学校経営」「組織経営」に全力を傾けることが、我々校長の使命であり責務であります。この言葉はとても抽象的・概念的で、私を含めその具体を明確にイメージするのは難しいのではないのでしょうか。学校の規模、地域の状況や学校に対するニーズ、児童生徒や保護者の実態等々、学校により大きく変わり、「学校経営」とひとくくりに論じるのは無理があります。でも、そこに普遍性や共通性を見いだすとしたら、「学校経営は校長一人でするのではない。教職員の主体的な参画と協力があつて初めて組織的に成り立つものであり、校長はリーダー、責任者としてビジョンや方向性、目標を明確に示し、その達成のために一人一人の教職員が自己の能力を十分発揮できる状況を作り出すこと」だと思います。人材育成にも通じることであり、先生たちが「この校長と一緒に仕事ができよかった。」と思えるような指導・支援、仕組み、人間関係等を作り上げることこそ、先生たちの個性や得意分野を生かした「人

間集団の経営」ができるのだと思います。

プロ野球の名将 野村克也氏が選手時代のあの試合を回想し、次のように述べています。捕手としてライバルチームの四番打者と対戦した時、ピッチャーにストレートを要求してホームランを打たれた。ベンチに戻って監督からストレートを要求したことをひどく叱られ、「そうか、あのような場面ではストレイトは禁物なんだ。」ということを学び、後日、同じような場面でカーブで勝負したところ、またホームランを打たれた。すると監督から、カーブを要求したことをひどく叱られ、では、どんな球種を投げさせるべきなのか尋ねると、「なに、俺に意見するのか。自分で研究せい。」の一言。野村氏はこのとき、「指導者は結果論でものを言ってはならない。考えた末の根拠があつての失敗は怒ってはいけない。」「後からなら何とでも言える。指導者なら先に方向性を示すべき」ことを学んだと。役職定年の年になり、これまでで最も学校経営の難しさを痛感している。自分は本当に学校をよりよくできているのか、預かった子供や先生たちを本当に幸せにできているのか、自問自答を最後の日まで続けるのが校長の使命であり、責務なんだろうと思う毎日である。

《私の主張》

感性を育てる



四国中央市 三島小学校 矢野 博幸

「感性」とは、物事を心に深く感じ取る働き、外界からの刺激を受け止める感覚的能力のことである。類語に、「感受性」「センス」「センシビリティ」がある。難しいことはさておき、私はこれまで、何かに感動したとき、素直にそれを表現できる子供を育てたいと考え、日々の教育活動を行ってきた。それは、学級担任であらうと特別支援学級担任であらうと、教頭そして校長となった今も変わらない。子供の感性を育てるためには、教師自身、自分の感性を磨かなければならないと思っている。おいしい料理を食べて満足したり、すばらしい音楽を聴いて背中がぞくついたり、感動する映画を見て涙を流したり、様々な体験を通して、心を揺さぶられる思いを積み重ねることを教師も怠ってはならない。

七月に入ったある日、この日は愛媛県に熱中症警戒アラートが発表されており、朝からうだるような暑さであった。登校して朝の準備を終えた一年生が、「校長先生、すぐ来てください」と額に汗をにじませながら、大慌てで校長室にやって来た。何事かと思い、後についていくと向かった先は、体育館へ続く外

る。

子供たちの豊かな感性を育むためには、時間と手間を掛けてでも、実物を用意したり、手づくりや手書きしたりすることが必要なこともある。手軽さや利便性が教師の働き方改革の観点から業務改善につながるののだとしても、一年生が育てているアサガオ。そっと触れると、葉の表面には小さな毛が生えていて、「校長先生、触るとふわふわして気持ちいい」と教えてくれた。映し出された映像は、その美しさを見ることはできても、手触り、においまでは伝わらない。本物に触れて得られる感動が、そこにはある。

秋来ぬと 目にはさやかに見えねども

風 風の音にぞ おどろかれぬる
古今和歌集に収録されている藤原敏行が詠んだ歌である。立秋になっても秋が来たとは、はつきりとは目には見えないけれど、風の音ではつと気付いたという情景である。私はこの歌を昇任校長として赴任した小学校で、全教職員に紹介した。はつきり目には見えないけれど、ちよつとした声や表情、服装、文字、態度などの変化から子供の思いに気付く、寄り添える感性を持つてほしいという願いからである。

思いは見えないけれど、思いやりは見える。心は見えないけれど、心遣いは見える。当たり前のことを当たり前に実行でき、当たり前のことを当たり前と思わず感謝できる感性を子供たちにも教職員にも育てていきたい。

《随想》



がんばれ！日本の子どもたち！

松山市 内宮中学校 神野 鉄也

教員生活三十六年目、これまで勤務した学校数は十校になります。一校一校に色濃い思い出がありますが、その中でも特に印象深く残る学校と言えば、在外教育施設派遣教師として勤務したペナン日本人学校と言わざるを得ません。

一、波もたゆとう インド洋

はるかに煙る 海原は

日本に続く 世界に続く

明るい未来を 夢にみる

ペナンに学ぶ われら日本の子どもたち

二、ハイビスカスの 咲く丘で

共に遊んだ 思い出を

いつか語ろう 故郷の友に

平和の願い 胸に秘め

ペナンに学ぶ われら日本の子どもたち

これがペナン日本人学校の校歌です。なんともすてきな歌詞でしょう？

私がペナン日本人学校に赴任したのは、平成十七年（二〇〇五年）四月でした。

当時は、全校児童生徒が約一三〇名でした

が、子供たちは小学部、中学部ともに仲が良く、勉強に運動にがんばっていました。私は、

小学校一年生から中学校三年生までの保健体育の授業、水泳指導、中学生の技術科の授業を担当しました。特に、小学校の勤務経験のない私にとって、小学校低学年の体育の授業はとても新鮮で、貴重な財産となりました。

また、音楽科の教員と協力し、和太鼓クラブの演奏曲に伊予の国・水軍太鼓の「出陣」を加え、様々なイベントで子供たちが演奏したこともよい思い出です。ルネサス高崎女子ソフトボール部（現ビックカメラ高崎ビークイーン）が来校し、宇津木妙子さんや宇津木麗華さんをはじめ、選手の皆さんとソフトボール交流をしたことも強く記憶に残っています。家族四人でマレーシアで三年間生活をし、私の二人の子どももペナン日本人学校にお世話になったこともあり、何かにつけてマレーシアやペナンのことは、よく家族の話題となっていました。

昨年夏。突然、ペナン日本人学校のニュースが我が家に飛び込んできました。それは、現在の校舎から学校を別の場所へ移転すると

いうものでした。現在の学校は、狭いながらも運動会が行えるほどの芝生のグラウンド、ジャングリズムと砂場、うんていや鉄棒のある中庭、バスケットコートが一面とれる体育館、二十五mのプール、図書館などの施設がありました。移転先にはグラウンドもプールも体育館もないとのこと。水泳のコーチをしていたリー先生はどうするんだろう？ 庭師のムティさんは？ 学校の守衛として敷地内に住んでいるラビイさんはどうなるの？ とお世話になった学校関係者への心配がまず頭に浮かびましたが、考えてみれば、ペナン日本人学校の子供たちの教育活動への影響が一番心配なところでした。そこで、ペナン日本人学校のホームページを開きました。するとそこには、学校長の

「教育に仮はありません。子供たちにとって一生に一度しかないかけがえのない貴重なこの一年間を、長い人生の中でも財産を築いた年だったと言ってもらえるようベストを尽くします。

令和七年度の新生ペナン日本人学校にご期待ください！」という力強い一文がありました。

そうです。ペナン日本人学校の子供たち、いや、在外教育施設で学ぶ子供たちが多少のハンデに負けるわけがありません。

がんばれ！ 日本の子供たち！

そして私も「負けないぞ！がんばるぞ！」とつぶやき、強く拳を握り締めたのでした。

《ふるさと自慢》

魅力いっぱい ふるさと新谷



大洲市 新谷中学校 中山 敏恵

大洲市内の東方に位置し、矢落川に沿って校区の広がる新谷中学校は、昭和二十二年に新谷村立新谷中学校として創立しました。平成三年三月に現在の校舎が落成して柳沢中学校と統合し、新生新谷中学校として現在に至っています。保護者も地域の皆さんも教育への関心が高く、学校行事や地域行事へも協力的で、自治会を中心とした活動も盛んです。その「ふるさと新谷」の魅力を紹介します。

《美しい自然の中で 稲荷山》

神南山の麓にある稲荷山公園は、美しい紅葉で知られており、大洲市指定の名勝「紅葉山」として愛されています。樹齢約二百年の老楓など約三千本のモミジがあり、秋には園内一杯に見事な紅葉で彩られます。毎年十一月二十三日の勤労感謝の日には、新谷自治会主催の「神南山登山」が行われます。昨年度は地域の子供、大人、他地域の方も含め、約百五十名が参加しました。参加者同士が会



話をしみながら、地域の歴史を学び、自然を楽しむ機会となっています。

《ホテルの里の神楽文化 藤縄神楽》

ゲンジボタルが舞う矢落川流域にある柳沢・田処地区において、愛媛県指定無形民俗文化財

の藤縄神楽が伝承されています。神楽は、十八演目で構成され、「悪魔払鬼四天」の演目などでは、鬼（ダイバ）と観客のやりとりがあり、舞台と観客が一体となつて進める場面が見どころの一つです。近年は、観光客らが大洲城天守で宿泊する「大洲城キャッスルステイ」でも披露されるようになりました。地域においては、毎年六月に旧柳沢小学校等で行われる「ほたるまつり」や十一月に雲海展望公園で行われる「雲海まつり」で披露され、地域の伝統芸能を間近で体感することができ、子供たちに地域の文化を伝える良い機会となっています。



《銀河鉄道999始発駅 新谷》

松本零士氏は戦時中、新谷地区に疎開し、幼少期の三年間を過ごしました。疎開当時、近所の子供たちと鰻取りや柿取り、昆虫採集などをして過ごしたこと、自宅から見える神南山の裾野を走る蒸気機関車など、戦時中の新谷の原風景から、銀河鉄道999を含め、多くの作品が生まれたそうです。新谷コミュニティセンターには「理想郷 大洲・新谷 命のふるさと」と刻まれた、零士氏の功績をたたえるモニュメントが建てられ、平成二十九年の除幕式には零士氏も参加されています。零士氏は「個々の目的や目標など違いはあるけれど、自分を信じ、自信を持って行動すれば、夢はいつか必ずかなう」と語られており、これは、夢を追いかける新谷の子供たちへのメッセージとなっています。

私は新谷中学校で中学生時代に三年間過ごし、教諭時代に五年間過ごしました。そして校長としての勤務が三度目の入学になります。豊かな自然・文化、そして地域の皆さんの温かい思いであふれる「ふるさと新谷」は私の誇りです。私を見守り、育て、鍛えてくれた「ふるさと新谷」に恩返しをする時が来たと思います。学校・家庭・地域が一体となって、ふるさとを愛する子供たちを育てていきます。



《校長講話》

「農家の来年」に就う



伊予市 翠小学校

木戸 悟

趣味で野菜を育てているが、病害虫や雑草への対策が未熟なために、思うような収穫を得られないでいる。残念がる私を見かねた農家の方が掛けてくださった励ましの言葉を、子供たちに紹介した。

「農家の来年」

作物の生産は見込みどおりに進むものではなく、失敗を繰り返すことが常であるようだ。

農家は「来年こそ成功させる。」と決意を新たにしている。取り組むものの、やはりうまくいかずに毎年同じせりふをつぶやくことになるという。自嘲気味に語られたけれども、その言葉には、苦境にあっても逃げ出さず、知恵を絞って課題に正対し続けるプロとしての気概がにじむ。子供たちには、成長過程にある者がつまずいたり悩んだりするのは当然のことであり、あきらめずに今の自分にできる努力を重ねることが大切だと話して聞かせた。また、目標に向かって挑戦を続けている限りゴールは近づいていくという言葉も付け加えた。

「三粒の種」

三粒の種を持っているなら、一粒は空を飛

ぶ鳥のために、一粒は地中の虫のために使い、残りの一粒を自分のために使うのでよいという。共生の大切さを示す言葉である。地球の生物は互いにつながっていて、良いことも悪いことも巡り巡って自分に返ってくることを子供たちに説いた。目先の利益を求めるのではなく、まずは自らの足元を見詰め、正しいと思うことを実践したり相手の気持ちを推し量って行動したりすることが肝要だと伝えた。

農業は作物という「命」を育む仕事であり、その理念には教育に通じるところも多い。子供たちに語った内容は、教職にある自らを戒める言葉でもある。今一度襟を正し、「農家の来年」のごとく、百折不撓の精神と進取の気性をもって子供たちに向き合っていきたい。

校内弁論大会講評×学校の教育目標



新居浜市 別子中学校

伊藤 良夫

「自分らしく他者とながり、社会を創造する生徒の育成」これは別子中学校の教育目標です。また、①「主体的で自立した生徒」②「多様な他者と協働する生徒」③「持続可能な社会を共創する生徒」が目指す生徒像です。皆さんの弁論は、これらの目標達成に必要な資質が着実に育まれていることを証明し

ました。弁論と①②③を重ねて話します。

① 自分の考えを言葉にし、文章として表現する作業は、まさに主体的で自立した活動です。「自分は大変な方を選びたい」と困難に挑戦する姿勢は、聞き手に勇気と自信を与えました。「楽しいって大切」という発表は、内側から湧き上がるモチベーションを見付けることの重要性を語りました。

② 多くの弁論で、他者との関わりを通じて成長や、多様性を認め協力することの大切さが伝わりました。「笑いの持つ大きな力」では、年齢や国籍を超えて人とながることで可能性が広がることを示し、「本を読むこと」を通して多様な価値観に触れる意義を確認できました。

③ 「SDGsへの意識」から節水という身近で具体的な行動につなげ、社会課題に対する意識の芽生えがうかがえました。「食べ物を無駄にしないために、自分が今できること」では、命の尊厳や食料廃棄問題に目を向けることの重要性が強く訴えられており、社会の共創に向けて、私たちが考えるべきことについて、深い示唆を与えた弁論でした。

皆さんが語った言葉や主張は、私たちの心に深く刻まれました。この経験が、皆さんのこれからの人生において大きな財産となります。今回得た学びを胸に、これからも「自分らしく他者とながり、社会を創造する生徒」として、それぞれの道を力強く歩んでくれることを期待しています。

《初任者に伝えたいこと》 考える力



八幡浜市 真穴小学校

山本 雅人

今年度、教職に就き、教師としての人生を歩き始めている皆さん！ 今、どんな日々ですか。充実していますか。悩んでいますか。きつとそれぞれの場所でそれぞれの思いを胸に日々を懸命に過ごしていることでしょう。そんな皆さんへ校長として。自分自身の、そして目の前の子供たちの「考える力」を育ててください。

さて「考える力」とは何でしょう。例えば「論理的思考力」。文献や研修の機会がよく目や耳にする言葉ですね。その力の育成は肝要ですが、「考える力」とはもっと包摂的な力だと私は捉えています。こう尋ねられたらどう答えますか。「戦争をどう思うか。」おそらく大多数の皆さんが「〇〇だからすべきではない。してはいけない。」すぐ論理的に答えを導くでしょう。「万一、一方的に侵略が起こったら…」そう付け加えるとうでしょう。即座に答えを導くことが難しい問いに変化していませんか。

世の中は、そして日々の教育においても、答えがすぐに出ない問いの方が圧倒的に多い

のではないかと私は感じています。私たち教員はややもすると答えのある問いを教えることに意識が行きがちです。しかし、教育の本質はそこではありません。日々の教育活動の中でぶつかるたくさんさんの「どうすれば？」を子供と共に考えることもあるでしょう。答えが簡単に見つからない問いを考え、最適解を求め、諦めず、周囲と関わり合い、よりよい社会を目指す力、それが考える力です。その力の育成こそが教育ではないでしょうか。

「教育は国家百年の計」皆さんの教育がこれからの子供たちをつくります。その子供たちがこれからの日本をつくるのです。皆さんのこれからの活躍を心から応援しています。

それぞれの「世代」として



伊予市 港南中学校

相原 勝

「Z世代」という言葉が耳慣れてきました。Z世代とは、一九九〇年代半ばから二〇〇〇年代に生まれた世代を指すそうで、まさに、教育現場にいる若者は、このZ世代ということになります。

今年度、本校では五十代の教諭から十代の事務職員まで五人の新規採用教職員が配置さ

れました。二人の研修免除者を除いた三人には、期首面談や初任者研修を通じて、教育計画にも示している私が思う教職員のウェルビーイングについて伝えました。

- ① こうしたいたいと思う気持ちを抱き、実現に向けた行動ができる
- ② 教育のプロとして責任と誇りをもつことができる
- ③ 生徒に寄り添い、同僚とともに分かち合うことができる

教職員として、まずは目の前にいる子供のために行動に起こしてほしい。そして、「創る」おもしろさを味わってほしい。将来的には、そこに自身の強みとなる確固たる柱ができてくれれば、と思います。

また、このZ世代はSNS等でつながることは得意な一方で、特に、上下関係のコミュニケーションは苦手な傾向があるとのこと。仕事上、「誰かと一緒に対処すること」が必要となつてきますが、だからこそ、「対話」を大事にして、共に思いや考えを分かち合つてほしいと思うのです。

この新しい世の中をスマートに生き抜くことができるのは「Z世代」。やっぱり泥臭く生き抜いてしまふのは我々「X世代」。最後に、「不易流行」の不易の部分は、時代が変わっても伝えていかなければなりません。ただ、令和の時代には、令和の伝え方があるということをお我々「X世代」も認識しておかなければなりません。